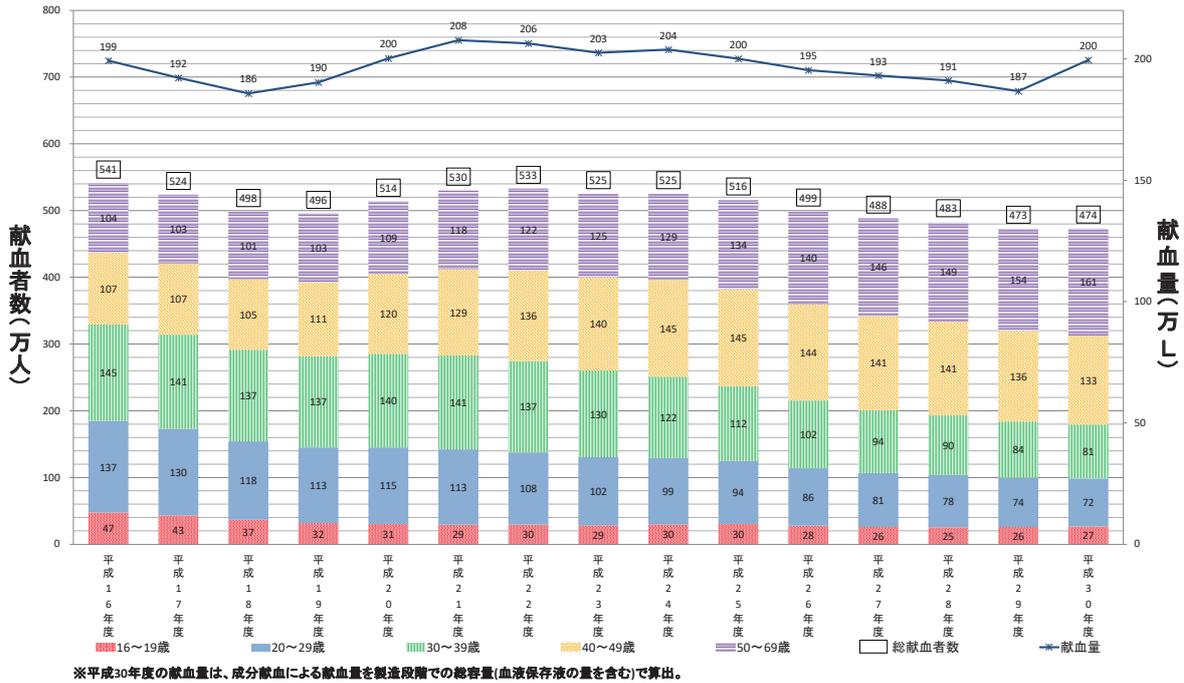


若年層に対する献血推進

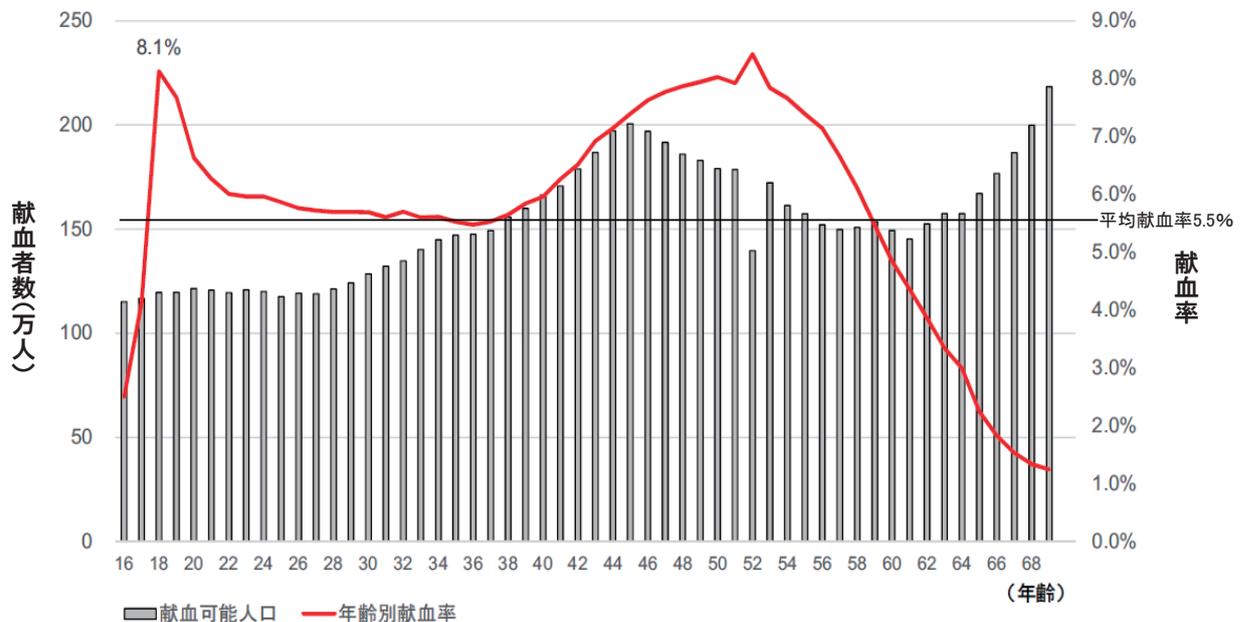
近年、一人あたりの献血量の増加などにより、以前と比べて少ない人数で必要な血液量を確保することができ、献血者数は全体的に減少傾向にあります。一方で、10代から30代の献血者数は、この10年で約4割も減少しており、全献血者に占める若い世代の割合は減少しています（図2-8）。また、平成30年度の年

齢別の献血率（献血可能人口に対する献血者数（延べ人数）の割合）を見ると、18歳では8.1%と平均の献血率5.5%と比べて高い数値を示しているものの、仕事や家事で献血する時間を確保できないなどの理由により、20代から30代前半にかけて、減少傾向となっています（図2-9）。



(日本赤十字社提出資料より厚生労働省作成)

図2-8 年代別献血者数と献血量の推移



(日本赤十字社提出資料より厚生労働省作成)

図2-9 年齢別献血可能人口と献血率

少子化で献血可能人口が減少している中、将来に亘り、安定的に血液を確保するためには、若年層に対する献血推進活動が、これまで以上に重要となっています。

厚生労働省では、若年層に対する献血推進活動の取組として、平成 17 年度から中学生を対象とした献血への理解を促すポスターを全国の中学校に配布しています。また、平成 2 年度から高校生向けテキスト「けんけつ HOP STEP JUMP」を全国の高校に配布しており、文部科学省の協力を得て授業での活用を求めています（図 2 - 10）。平成 21 年 7 月に改定された「高等学校学習指導要領解説／保健体育編」に「献血の制度があることについても適宜触れる」ことが追記され、平成 25 年度から高校の保健体育の授業でこのテキストを活用していただく環境が整いました。さらに、平成 30 年度からは大学生を対象とした献血啓発ポスター（図 2 - 11）を全国の大学に配布しているほか、新たな取組として、献血アイドルのキャラクターを使った若年層向けの啓発映像を作成しました（図 2 - 12）。

こうした普及啓発資材を活用した取組に加えて、文部科学省の協力を得て、高校等における献血に触れ合う機

会の一環として、日本赤十字社が実施している学校献血や献血セミナーを積極的に受け入れてもらえるよう関係者に協力を依頼しています。

また、地方公共団体及び日本赤十字社では、地域の実情に応じて、小中学生の段階から献血に関する知識の普及啓発を目的とした「キッズ献血（模擬献血）」を行っているほか、社会福祉法人はばたき福祉事業団による、幼児向けの絵本「ぼくの血みんなの血」や厚生労働省ホームページの「けつえきのおはなし」など、幼少児期からの取組も行われています。

一度献血を経験した方に継続して献血をしていただくことは、必要血液量を安定的かつ効率的に確保するだけでなく、安全な血液製剤の供給の観点でも重要です。日本赤十字社では、献血 Web 会員サービス「ラブラッド」（図 2 - 13）を運営し、継続的な献血への協力を呼びかけています。

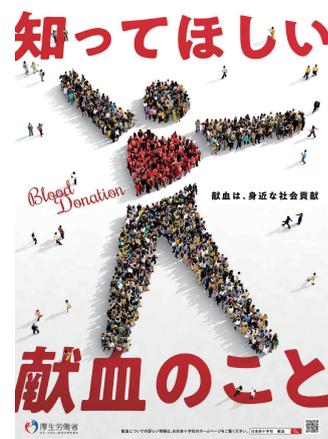


図 2 - 10 中学生を対象とした献血への理解を促すポスター（左）、「けんけつ HOP STEP JUMP」（右）

図 2 - 11



図 2 - 12

複数回献血クラブ「ラブラッド」のご紹介

「ラブラッド」は、日本赤十字社と献血者をつなぐWeb会員サービスです。安全な献血液を安定的に確保する事を目的として運用されています。全国の献血ルームでの献血をスマートフォン・PCから簡単に予約・変更することができます。

- 次回献血可能日のお知らせが届く!
- 血液検査の結果をWebで確認できる!
- ポイントを貯めると記念品がもらえる!
- 会員限定のキャンペーンや特典情報が届く!

図 2 - 13

患者さんの声

輸血をしてもらう

小学校3年生の時に体調不良の日が続き、病院に行き検査をすると「急性骨髄性白血病」とわかり入院をしました。

抗がん剤治療と骨髄移植をするために1年3か月入院をしました。治療中、数えきれないぐらいの輸血をしました。

輸血しないで、抗がん剤治療だけしていても、私は、今ここにいることができません。

献血呼びかけボランティアをはじめて

私は、輸血をしたので、献血はすることができませんが、「何か手伝えることはないかな?」と探しているときに、「献血呼びかけボランティア」というのを見つけました。

献血ルームに行くと、献血に来てくれている人が大勢いて、私と同級生ぐらいの高校生も大勢いたので、びっくりしたと同時に、「献血ルームに来てくれる人がいるから、輸血ができたんだな。」と感謝しかありません。

これからも、多くの人に献血を知ってもらい、献血したり、他の人に広めて行ってほしいです。



北東 紗輝さん



40歳で診断された難病



恒川 礼子さん

仕事や子育てに走りまわっていた40歳の時に自己免疫の病気「重症筋無力症」と診断されました。全身の筋肉に力が入りにくく、すぐに疲れてしまう。その時服用していた薬の副作用に悩まされ、気持ちと身体をだましながら毎日を過ごしていました。

救ってくれたのは、献血から生まれた薬

そんな時新たな治療法として免疫グロブリン療法を取り入れることになりました。この治療の薬はみなさんが献血してくださった血液からつくられます。免疫系の病気の仲間もこの薬のおかげで命をつなぎ、学校生活や社会生活を送ることができるようになっています。献血をしてくださったみなさんに心より感謝申し上げます。

